

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

いかつの
雷野遺跡

平成7・8年度県営農地保全整備事業上三財地区1工区水兼農道
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1997・3

宮崎県・西都市教育委員会



1号住居跡検出状況（平成 7 年度）



2号住居跡検出状況（平成 7 年度）

序

西都市教育委員会では、児湯農林振興局の委託を受けて、平成7・8年度県営農地保全整備事業（上三財地区）に伴い雷野遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査結果の報告であります。

今回の調査では、北側部分（2次）はかなり攪乱されており、遺構等は検出できませんでしたが、南側部分（1次）において古墳時代と推定される竪穴式住居跡が2軒検出されました。

このことは、古來より同地域が生活の適地として利用されていたことを示すもので、集落跡の存在が確認され、大きな成果をあげることができました。

本報告が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた宮崎県教育庁文化課・宮崎県児湯農林振興局をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成9年3月25日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

例　　言

1. 本書は、平成7・8年度県営農地保全整備事業上三財地区1丁目水兼農道工事に伴い実施した雷野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県児湯農林振興局の委託を受けて、西都市教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査及び図面作成等については養方政幾・岩田陽子が行った。
4. 本書の執筆・編集は養方が行った。
5. 本書に使用した方位は磁北である。
6. 土層などの色調は農林水産技術会議事務局監修の標準土色帳による。
7. 調査で出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館において保管している。

目 次

第Ⅰ章. 序説.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の体制.....	1
第Ⅱ章. 遺跡の位置と歴史的環境.....	2
第Ⅲ章. 調査の概要.....	4
第Ⅳ章. 遺構と遺物.....	7
第Ⅴ章. まとめ.....	9

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	3
第2図 調査区基本土層図.....	4
第3図 調査区域図.....	5 ~ 6
第4図 1号住居跡実測図.....	7
第5図 2号住居跡実測図.....	8
第6図 出上遺物実測図.....	10

図 版 目 次

図版1 遺構等検出状況.....	11
図版2 出上遺物.....	12

第Ⅰ章. 序 説

第1節. 調査に至る経緯

宮崎県児湯農林振興局において、雷野地区を含めた周辺地域が、降雨時には畑面が著しく浸食され、道路も狭く砂利道で水路の役目をしているため、流末は洗掘が激しく、毎年多大な補修を繰り返していることから、農業の生産性の向上と農村の健全な発展を目的とした県営農地保全整備事業が実施されることとなった。

この雷野地区は、雷野遺跡として「周知の埋蔵文化財包蔵地」に含まれる地域で、昭和60年度実施した遺跡詳細分布調査において弥生土器や土師器片などが発見されており、集落跡の存在が想定される重要な地域である。

このようなことから、埋蔵文化財の現状保存について協議を重ねたが、施行上現状保存が困難なことから、水兼農道予定地全域が調査対象となった。

発掘調査は、宮崎県児湯農林振興局の委託を受けて、西都市教育委員会が主体となり実施した。

調査期間は、平成7年度が平成7年11月9日～12月25日、平成8年度が平成8年11月7日～11月19日である。

第2節. 調査の体制

[平成7年度]

調査主体 西都市教育委員会

教育長 平野 平

社会教育課長 三輪 公洋

同文化財係長 伊達 博敏

同文化財主事 鹿嶋 修一

調査員 社会教育課主事 義方 政幾

同主事補 岩田 陽子

調査指導員 篠原時江・緒方タケ子・長谷川クミエ・藤原秋子・黒木トシ子

川崎ヒロ子・緒方シヅエ・疋田はる子・廻田和子

廻田 勉・長谷川利幸

整理作業員 橋口三十三・義方玉江

[平成8年度]

調査主体	西都市教育委員会
	教 育 長 平 野 平
	社会教育課長 佐々木 美 徳
	同文化財主事補 鹿 崎 修 一
調査員	社会教育課係長 斎 方 政 篤
調査補助	同 主 事 日 高 慶 …
調査指導員	篠原時江・緒方タケ子・長谷川クミエ・黒木トシ子・川崎ヒロ子 緒方シヅエ・疋田はる子・廻田和子
	廻田 勉
整理作業員	守部牧子

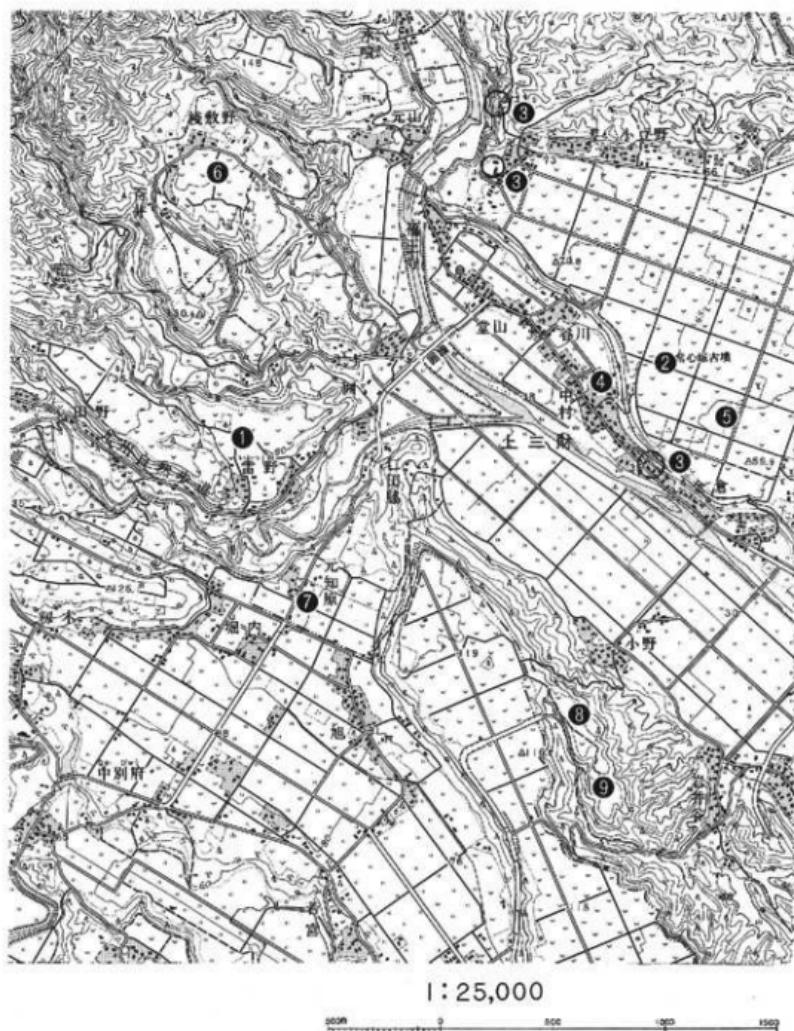
第二章. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、宮崎県のほぼ中央部に位置する内陸都市で、地形としては西方に九州山地を背負った形容を表し、その九州山地から岬様に南東へ、東へと幾状にも台地が延びている。また、市街地を中心とする平野部を南流する一つ瀬川及び支流の三財川・三納川などが沖積地を潤し、豊かな農地が形成されている。

西都市の遺跡は、この幾状にも延びた台地上を中心に分布しており、雷野遺跡も九州山地がわずかに東方に延びた標高100mの雷野台地上に位置している。

本遺跡の東方で、谷を隔てた小豆野原台地上には、方墳に方形の土堤を巡らせた国指定史跡・常心塚古墳が単独で所在し、また、同台地東側縁辺部には前方後円墳6基・円墳67基・横穴墓4基で構成された県指定史跡・三財古墳群が分布している。さらに、南東方向には昭和45年に7基の地下式横穴が確認され、市教育委員会によって発掘調査が実施された元地原遺跡が位置している。

本遺跡は、昭和60年度の遺跡分布調査において弥生土器・土師器片などが確認され、本調査前に実施した踏査においても土師器や打製石斧などを採取しており、集落跡の存在が想定されることから、歴史的にも重要な地域である。



- | | | |
|----------|---------------|---------------|
| 1. 雷野遺跡 | 2. 常心塚古墳（国指定） | 3. 三財古墳群（県指定） |
| 4. 中村遺跡 | 5. 外原遺跡 | 6. 棱敷野遺跡 |
| 7. 元地原遺跡 | 8. 小野城跡 | 9. 中ヶ原遺跡 |

第1図　遺跡位置図

第Ⅲ章. 調査の概要

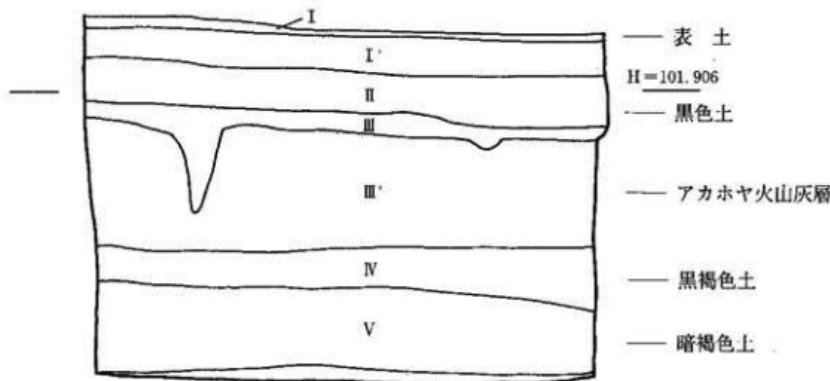
調査は、道路部分と拡幅される部分について全面実施したが、工事の関係で平成7年度と8年度の2カ年に分けて行った。調査面積は、平成7年度が 600m^2 、平成8年度が 400m^2 の計 $1,000\text{m}^2$ で、アカホヤ火山灰層を中心とした調査を実施した。

本遺跡の基本土層は、第I・I'層が表土、第II層が黒色土、第III・III'層がアカホヤ火山灰層、第IV層が黒褐色土、第V層が暗褐色土であるが、アカホヤ火山灰層は他地域に比べて非常に厚く50cmも堆積している。

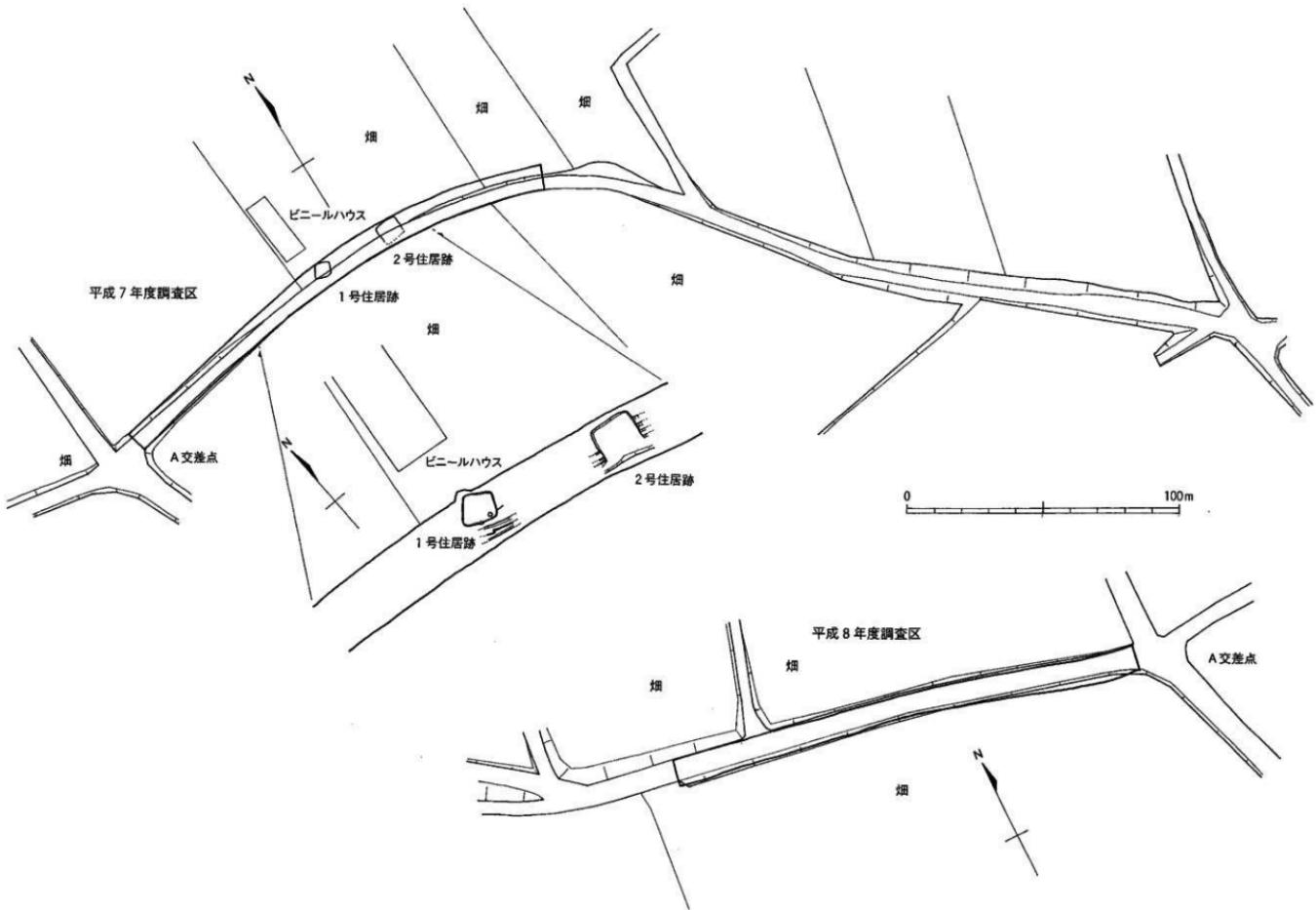
調査の結果、平成7年度の調査で竪穴式住居跡2軒が検出された。いずれも、わずかの遺物しか出土しなかったが、古墳時代のものと推定される。

その他、溝状遺構などが検出されたが、後世のもので近世あるいは近代のものと推定される。

道路及び拡幅部分の狭範囲の調査ではあったが、古墳時代のものと推定される竪穴式住居跡などが検出されるなど成果をあげることができた。



第2図 調査区基本土層



第3図 調査区域図(平成7・8年度)

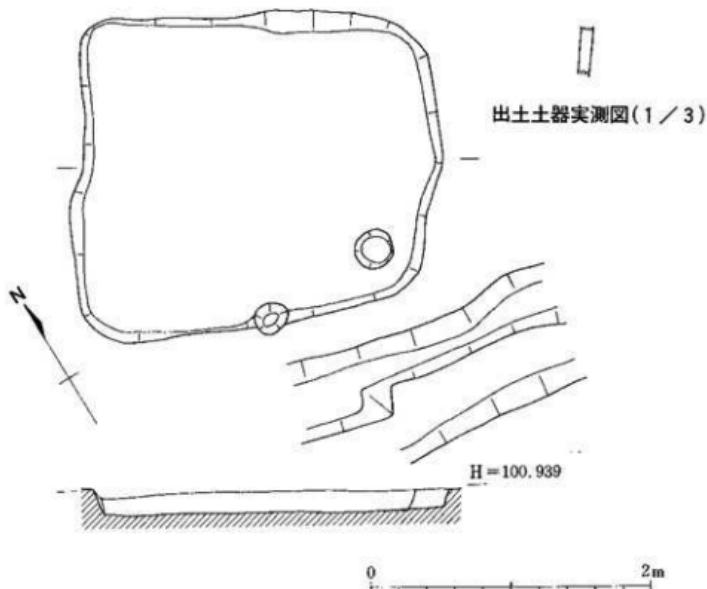
第IV章. 遺構と遺物

1. 遺構

遺構は、平成7年度の調査において、竪穴式住居跡2軒と溝状遺構などが検出されたが、平成8年度についてかなり下層まで擾乱がはげしく遺構の検出はできなかった。

1号住居跡は、長軸2.57m・短軸2.02mの規模を有する方形プランのもので、検出面からの深さ0.11~0.17mを計る。床面は北側に傾斜しているもののほぼ平坦である。ピットが2個検出されているが、1つは深さが0.04mと非常に浅く、もう1つも壁面を切っており、支柱に関連したものではないと思われる。なお、この1号住居跡の南側には東西方向に延びた溝状遺構が検出された。

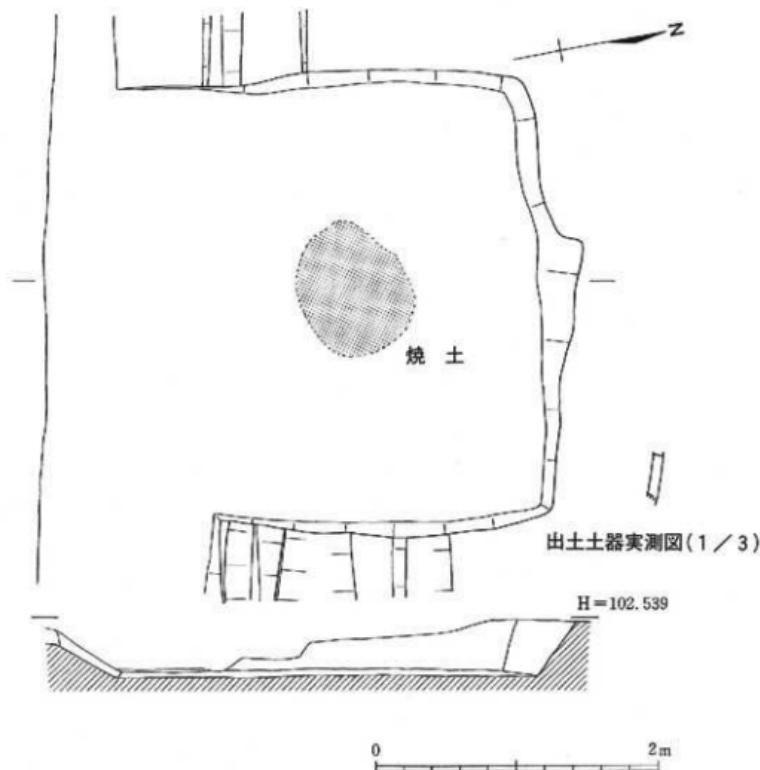
遺物は、わずかに土師器1点が出土したのみである。土師器は小片で器形は判断が難しいが、壺形土器か壺形土器の破片と思われる。外面はヨコナデ、内面はナデ調整である。



第4図 1号住居跡実測図(1／40)・出土土器実測図(1／3)

2号住居跡は、南側を1号住居跡から伸びている2~3条の溝状遺構が切っており、南壁については確認できなかった。一辺3.30m程の方形プランのものと推定され、検出面からの深さ0.38mを計る。床面は平坦で、中央部から 1.00×0.80 mの範囲内で焼土が検出された。主柱は確認できなかった。

遺物は、1号住居跡同様少なく、焼土周辺の床面から土師器1点が出土したのみである。器形は小片であるが、壺形土器か壺形土器と思われる。内外面ナデ調整である。



第5図 2号住居跡実測図(1/40)・出土土器実測図(1/3)

1号住居跡及び2号住居跡の南側で検出された溝状遺構は、調査対象地の北方から伸びているもので、幅0.30~0.60m・深さ0.10~0.25mを計る。この溝状遺構については検出状況などから旧道の脇溝と思われる。時代的なことは不明である。

2. 遺物

遺物については平成7・8年度ともわずかで、遺構に伴って土師器が2点のみである。あまりにも小片で不明な点も多いが、周辺地域から叩き目が施された5世紀頃に比定される土師器が出土しており、同時期のものと推定される。

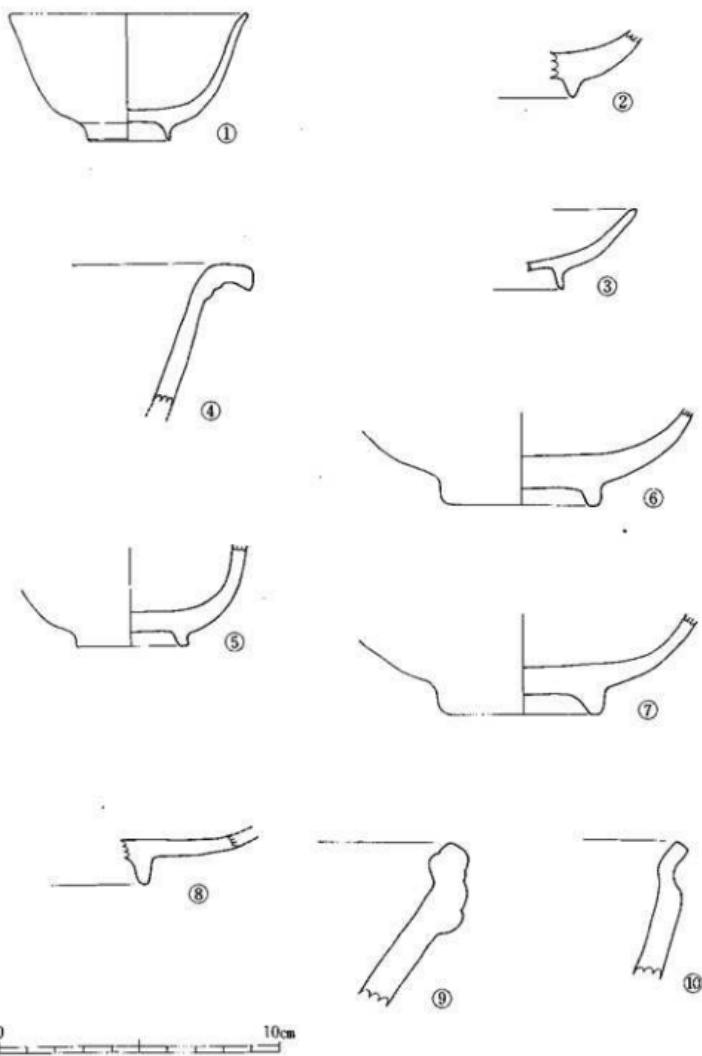
その他は、いずれも平成8年度調査区の攪乱土から出土したもので、染付・陶器・磁器・擂鉢などが出土している。1～3は染付の碗で、「寿」文字や葉・草などが描かれている。4は口縁部が「く」字状を呈している陶器鉢の口縁部、5・6は陶器鉢の底部、7は陶器碗の底部、8は陶器皿の底部である。9は口縁部が肥厚、10は逆に口縁部の厚さが薄く、「く」字状を呈した擂鉢の口縁部である。いずれも、近世以降のものと推定される。

第V章. まとめ

雷野台地の東方に位置している小豆野原台地には三財古墳群が分布し、また、前原・金倉・常心原地区からは多数の地下式横穴が確認されている。さらに、南東の元地原台地からも7基の地下式横穴が確認されていることから、本調査においても地下式横穴や古墳に関連した遺構の存在が想定されたが、古墳時代の堅穴式住居跡2軒が検出されたのみで、地下式横穴は確認できなかった。

古墳時代以前については、昭和60年度の市教育委員会による遺跡詳細分布調査によって弥生土器が採取され、また、本調査以前に実施した踏査によって縄文時代のものと思われる打製石斧も確認されているものの、これらに関連した遺構は検出できなかった。しかし、このことは、当地域が適地として古来より生活が営まれていたことを示すもので、全体の把握は、今後の資料増加に期待せざるを得ない。

これら遺構の検出が少ないのは、道路部分のみの狭範囲の調査に起因しているが、堅穴式住居跡が検出されたことは、周辺地域に集落跡の存在が想定されることから注目される調査結果であった。



第6図 出土置物実測図(1/2)

図 版

図版 1



雷野遺跡近景

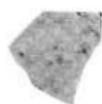


1号・2号住居跡確認状況(平成7年度)



調査状況(平成8年度)

図版 2



1号・2号住居跡出土土器



②

③

④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第26集

雷野遺跡

平成9年3月25日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 なかむら印刷所
